

美容専門学校における哲学対話の試み

——哲学の〈講義＝流れ〉に誘うために——

Philosophical Dialogues in a Beauty School:
For Inviting Students into the “Cours” of Philosophy

戸澤 幸作（慶應義塾大学、真野美容専門学校 非常勤講師）

はじめに

本研究報告は、本邦でも前例のない美容専門学校における哲学プラクティスの実践を紹介する。それと同時に、哲学史研究者である報告者自身の学校法人真野美容専門学校における哲学対話の実践を事例として、その試行錯誤の軌跡を報告することで、似たような境遇に置かれる可能性のある若手哲学史研究者に、哲学プラクティスを行う際のヒントを提供したい。本研究報告は、以下の3つの章から成る。第1章では、真野美容専門学校における哲学対話導入の経緯と実施概要を説明する。第2章では、同校の哲学対話導入1年目に行った対話実践の概要とその反省点を報告する。最後に第3章では、そこでの反省を活かして現在行っている対話実践とその効果について、学生たちの反応も含めて報告する。

1. 真野美容専門学校における哲学プラクティス導入の経緯

最初に、学校法人真野美容専門学校における哲学プラクティス導入の経緯について記したい。同校は、その校名の通り、美容師や美容関連の専門職に就くための専門学校である。一般的にみて哲学プラクティスを必要とするタイプの教育機関ではないが、2021年度から新たな取り組みとして一般教養科目の枠で「哲学」を設置し、ほぼ月1回のペースで美容科（2年間で美容師の国家資格取得を目指すコース）の各学年に開講している。

参考までに、2021年度の実施状況を図1に示す。なお、2022年度現在は、1年生と2年生それぞれに開講している。

受講者（1学年3グループで実施）	授業回数（24回）
Aグループ（17名 女：14名、男：3名）	8回
Bグループ（17名 女：14名、男：3名）	8回
Cグループ（17名 女：14名、男：3名）	8回

図1 2021年度の実施状況と内訳（初年度は1年生のみ実施）

報告者は、同校の一般教養科目「哲学」の最初の講座立ち上げに携わる講師として招聘された。同じく専門学校でも、看護・医療系や工学系であれば、医療倫理や技術者倫理の枠内でこうした取り組みを導入する事例はあるだろう。しかし、美容専門学校という、カリキュラム上必ずしも要請されていない現状で哲学プラクティスの導入を決めた同校の見識の広さと先進的な取り組みへの積極性は、他に類を見ないものである。同校は、若い学

生たちに美容の意義、美容師という職業の素晴らしさ、美容師としての自分自身の将来について考えさせると同時に、自分の人生について、そしてこの社会について、自らの力で考え、表現し、他者と意見を分かち合う機会を提供すべく、哲学教育の導入を決定した。

2. 2021 年度に実施した哲学プラクティスとその課題

本章は、真野美容専門学校における一般教養科目「哲学」導入初年度（2021 年度）の事例を報告し、そこで浮き彫りになった課題を記す。ここで言う課題とは、「人が生きるなかで出会う様々な問いを、人々と言葉を交わしながら、ゆっくり、じっくり考えることによって、自己と世界の見方を深く豊かにしていくこと」という哲学プラクティスの理念に照らして、という意味である⁽¹⁾。具体的には、次のような課題があった。哲学対話に携わる者は教師ではなくファシリテーターであり、あくまで主体は参加者、教師は伴走者である、と口で言うことは簡単だが、実際に授業を設計する段階で、哲学プラクティスを実施する組織のニーズに合わせてこの理念を実現するためには、具体的な工夫が要る。以下は、初年度に扱った哲学対話のテーマ一覧とその実施概要である。

授業テーマ	実施概要
愛とは何か？（全 1 回）	映画『散歩する侵略者』の一場面を鑑賞後、その内容について議論することで、さまざまな愛のかたちについて考察する。
かわいい／カッコイイとは何か？ （全 2 回）	時代やジャンルの異なるかわいい or カッコイイとされた画像（西洋古典絵画、浮世絵、スナップ写真、現代アート）を鑑賞し、それについて議論することで、時代や地域、文化や社会のあり方によって多層的に変わる美意識のあり方について議論する。
自由とは何か？（全 2 回）	（初回）自由意志と決定論の対立という哲学史上繰り返し提起されてきた問題を紹介し、それについて各自が思いついた具体例を挙げてもらい議論する。（第 2 回）映画『マイノリティ・リポート』の冒頭部分を鑑賞後、完全な未来予知による犯罪予防が実現した世界という映画の設定に基づいて、そのような世界の是非を議論する。
人生における幸福とは何か？ （全 2 回）	（初回）幸福を巡る哲学史上の主要な対立（快樂説、欲求充足説、客観リスト説）を紹介し、それらの問題点について議論する。（第 2 回）永井均「『星の銀貨』の主題による三つの変奏」（『道徳は復讐である』所収）を読み、その内容について討議する。

図 2 2021 年度「哲学」実施概要

上掲の図 2 に明らかなように、設定したテーマ自体はどれも標準的なものと思われるが、その扱い方が哲学プラクティスの理念からは外れている。講師としては、何か話し合うためには、その材料となる情報が必要なのではないかとの考えから、毎回の授業冒頭に

10～15分程度の解説を行い、その問題提起に対して議論をしてもらう構成を採った。しかし、このような授業設計がそもそも間違いであった。なぜなら、冒頭で講師が一方的な解説を行い、しかもそれが参加者にとっては馴染みのない話の場合、学生たちは完全に受け身の姿勢になってしまい、そこから自分の意見を自由に話すことは極めて難しいからである。もちろん、授業内では、その都度興味深い意見を述べる学生もおり、最終授業日に実施した授業内アンケートにおいても「面白かった」、「興味深かった」、「普段話し合う授業は少ないので、コミュニケーションをとる機会として良かった」といった肯定的なコメントもあったものの、「難しかった」、「眠かった」というコメントも少なからずあり、哲学対話の実践としては改善すべきものだと実感した。

3. 2022年度に実施した哲学プラクティスの概要とその改善点

本章では、2022年度現在の真野美容専門学校における一般教養科目「哲学」の概要を報告する。なお、本稿執筆時点（11月中旬）は2022年度の途中ではあるが、国家試験と就職活動を控えた2年生は10月ですべての授業回を終了しており、1年生向けの授業を数回残すのみの状況である。前年度の反省点を踏まえ、2022年度の哲学プラクティス実施にあたっては、テーマ設定以上に哲学対話のフォーマット自体を工夫した。以下では、2022年度に取り組んだフォーマットのうち、特に有効であった「グループ対話」を紹介する。

授業テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・美容とは何か？ ・美容師はアーティスト？ ・〈私〉って何だろう？ ・ロボットと恋愛できる？ ・自由課題（各グループで自由に決める）
実施手順	<ol style="list-style-type: none"> ①冒頭でその日のテーマ・趣旨を説明（5分程度） ②グループ分け（1クラス2グループが基本。1グループ8人程度。） ③各グループでじゃんけんを行い、ファシリテーターと書記を決める。 ④グループごとに自由対話。ファシリテーターには、グループ全員に発言の機会をつくることと、誰かの発言には必ず質問することを伝える。 ⑤授業の最後に各グループの書記に対話の内容をプレゼンしてもらい、クラス全体で他のグループの対話内容を共有して終わる。

図3 2022年度「哲学」実施概要（グループ対話）

2022年度の授業設計においては、できるだけ講師の介入を減らすこと、可能であればまったく介入しないことを目標とした。なぜなら、講師が不必要に発言することによって、講師が正しい答えや対話の方向性を示唆しているという誤った認識を学生たちに与えるからである。実際、上掲の図3に示したフォーマットにおける哲学対話では、手順を説明すること以外ほとんど講師が介入する必要は無かった。以下、このフォーマットについての補足説明を行う。

グループ対話は、現在大学の一部の講義において導入されているアクティブラーニングの手法を参考にしつつ考案したフォーマットである⁽²⁾。このフォーマットの利点としては、

①ファシリテーターや書記の役割も学生が担うことでクラス全体の主体的な参加を促すことができること、②対話の構築から振り返り（プレゼンテーション）まですべてを学生に委ねることができること、を挙げることができる。利点①については、学生自身がファシリテーターを務めることによって、仲間内での気楽さが生まれ、より自由闊達な意見交換が望める。ファシリテーターは、事前に講師が提示した9つのQワードを用いて発言者に質問を投げかけることによって、グループ内の議論を活性化させる。利点②については、あえて講師が手綱を緩めることで、むしろ学生たちの本来の対話能力やグループをオーガナイズする能力が発揮されることが分かった。講師は、各グループの対話が始まってからは、それぞれのグループに時おり顔を出して進捗具合を確認し、必要であれば最小限のコメントをするだけで十分である。また、グループ分けやじゃんけんなどのゲーム要素を取り入れることで、学生たちの授業への集中力を維持する効果も得られる。報告者自身はこのフォーマットに大きな問題点は感じておらず、今後もこの方式を基礎にしてさらなる発展を期したいと考えている。

以下に、2021年度の授業も経験している2年生に対して2022年度最終授業内で行ったアンケートのうち、グループ対話に関する主要なコメントを紹介する。

肯定的意見	否定的意見
<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで話し合うより、すこし少人数になるので話しやすかったです。 ・数人ではなく、6人ぐらいの考えが飛びあって、とても良い対話ができた。 ・両方同じ話題でも中身が違うことが分かり、深いと思った。 ・人それぞれの意見を互いに言い合っていくのは難しい部分もあったけど、いろんな自分とは違う意見が聞けて面白いと思った。 ・一番哲学しているな、と感じた。意外と皆しっかり意見を出していて、色々な意見を聞くことができて面白かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1つの問いに対して、それぞれ違う思いが出てすごいなと思ったけど、途中何をやってるか分からなくなることがあった。 ・人前で発表しなくちゃいけないから。半強制的に意見を言わせてる感がある。 ・むずかしすぎて、どんなことを言えばいいのかわからなかった。 ・意見を発言することが苦手な人が多いから、話が広がらない。 ・話せる人がいれば楽しい。

図4 2022年度「哲学」授業内アンケートからの抜粋（2年生の最終授業で実施）

上掲の図4に見られるように、まだ改善の余地はあるものの、自分たちで哲学的な探究ができた実感できている学生の満足度は高い。また、否定的意見を書いた学生については、「正しい答えにたどり着かなければならない」、「良い意見を言わなければならぬ」という誤解から、プレッシャーを感じている印象を受ける。今後は、この対話実践の目的をより一層丁寧に説明して、こうした先入見を解除していく必要を感じている。

おわりに

本研究報告は、真野美容専門学校において2021年度から導入された哲学プラクティスの2年間の軌跡を辿ることで、哲学史研究者がこの実践に携わる際に必要とされる基礎的な

態度を考察した。報告者は、哲学プラクティスの現場においては、講師の哲学史の知識そのものが余計な夾雑物になる可能性があると考えている。なぜなら、そうした知識があることによって、特定の主題について、いくつかの可能な議論の方向性を事前に想定してしまうからである。そうした想定に基づいて授業計画を立てることで、講師は参加者たちの思考の自由を奪ってしまう可能性があるうえに、彼／彼女らの発言を、そうした知識に照らして理解・評価してしまうことも危惧される。報告者は、この2年間の経験を経て、講師は対話の環境づくりに専心するべきであり、彼／彼女らを思考の「流れ」に誘い、その「流れ」をせき止めることなく、むしろ「流れ」にまかせるべきであると考えている。その行き着く先がどこなのかは全く重要ではないし、対話内容に何らかの意義を見出すことがあるとしても、それを見出すのは他ならぬ参加者たち自身であるべきである⁽³⁾。

最後に、報告者の専門領域である20世紀後半のフランス哲学を引き合いに出したい。『ポストモダンの条件』で知られるジャン＝フランソワ・リオタールは、哲学の「講義」について次のように言っている。

「再び始めなければならない。あらかじめ準備して問いに向かう精神、教室において、はじまりから講義＝流れ(cours)を開始しない精神、再開しない精神は、哲学教師の精神も含めて、哲学者ではありえない⁽⁴⁾。」

リオタールにとって、哲学の「講義」とはフランス語の字義通り「流れ」なのであり、思考がその度ごとに新たな「流れ」のなかに自らを見出すプロセスなのである。そこには驚きがあり、戸惑いがあり、そして喜びがあるだろう。アカデミックな世界でのいわゆる「哲学」教育にこのようなプロセスが無いとは言えない。新たな概念を学ぶ度ごとに、私たちの思考は見知らぬ「流れ」のなかに自らを見出すだろう。だが、このやり方しか無いわけではない。リオタールが言うように、もしも哲学という営みが、新たな「流れ」のなかに思考が自らを見出すプロセスそれ自体の謂いであるならば、哲学プラクティス（すなわち、哲学の実践）とは、そのような「流れ」に身を浸す運動のことなのではないだろうか。だとすれば、哲学史の知識など不必要であるばかりでなく、むしろこの運動を阻害することさえあるだろう。少なくとも、講師は教室内でそれを忘れる努力をすべきであるし、知識ではなく「流れ」に身を浸す運動にこそ気を配るべきである。報告者は、今後もこうした思考の「流れ」に参加者を誘うフォーマットづくりに、より一層力を注いでいく所存である。

【註】

- (1) 河野哲也編『ゼロからはじめる哲学対話——哲学プラクティス・ハンドブック』ひつじ書房、2020年、3頁。なお、同書の第2章および第3章第5節などで語られているように、哲学プラクティスという名の下に包摂される対話実践は多様であり、本稿の第2章で紹介する実践例も、時と場合によっては有効に機能することもあると報告者は考えている。
- (2) 哲学対話を始める前に行われるアイスブレイクの手法としてしばしば紹介される「質問ゲーム」も参考にした。ただし、アイスブレイクではなく対話の本番である点が大切である。
- (3) 報告者は、以上の〈対話内容ではなく対話の「流れ」ないし運動の方こそ重要である〉という

論点について、20 世紀後半のフランス哲学、とりわけジル・ドゥルーズの哲学がその理論的な基礎を提供しうると考えている。この点については、機会を改めて考察したい。

- (4) Jean-François Lyotard, *Le Postmoderne expliqué aux enfants Correspondance 1982-1985*, Éditions Galilée, 1986, p. 157.